

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



▲屋上庭園 屋上テラスは緑に囲まれ、花壇に色どられる。四方の景色もビュースポットである。



▲1階内部の様子 1階は大人向けと地域資料を並べる。2階は雑誌・新聞コーナーと自習室。3階は児童書のフロア。



▲北東の今池親水公園ごしに外観をのぞむ(田井城3丁目・今池) 西側の窓からは、午後になると、池に反射して揺らぐ太陽の光が天井に映る。



▲西南の長尾街道から見た外観

田井城のため池を生かした図書館古墳をイメージ人工物から自然へ

本年一月二十六日、松原市民松原図書館、いわゆる読書の森がオープンして四周年を迎えました。長尾街道に沿う田井城三丁目の今池を利用して建っています。今池は江戸時代以降、丹北郡田井城村の田畑に水を送るため池です。

昭和五十五年(一九八〇)、今池の北半分が埋め立てられ、市民体育館が建てられました。平成十五年(二〇〇三)、今池親水公園がつくられた後、令和二年(二〇二〇)に読書の森が池を埋めず、水面を残して開館したのです。

今池は池敷面積一・三二ha、水面面積一・〇六ha、貯水量二・〇三万m³の長方形の池でしたが、昭和五十五年に〇・六八haが潰廃されました。

今池に東接して、明治時代には新池も掘られました。新池は、今池よりもやや大きく、方形をしていました。池敷面積一・六五ha、水面面積一・三三ha、貯水量二・六四万m³でしたが、昭和五十一年(一九七六)、松原中央公園、松原市文化会館や読書の森の前身となる松原市民松原図書館が建設され、潰廃したのです。

さて、読書の森は、今池親水公園と一体化しています。今池は本市第一号の親水公園で、都市化が進む中、市民が気軽にため池の水や堤の緑、生息する魚や飛来する鳥などに心休める場と

して整備されたものです。身近に水辺を感じることでできる親水デッキやテラス、休憩所などを設置しています。

松原市制施行時の昭和三十年代初め、市域には多くのため池が分布していました。当時、ため池の総面積は一六〇・三〇一haに及び、市域面積のほぼ一〇分の一という大きな割合を占めていました。松原はため池の町と言っているほど、人々の中に溶け込み、かんがい池として、一面に広がる田畑に水を送っていたのでした。

今では、その多くが埋め立てられましたが、ため池は自然と触れ合い、潤いと豊かさを実感できる空間として存在しているのです。読書の森は、松原市民松原図書館の愛称で、文化会館の南側にあつた旧図書館を今池に移し、建て替えたものです。愛称は、市内の小中学生からの公募で決まりました。現在、約三十万冊を所蔵しています。

設計はMARKU. architectureの高野洋平さんと森田祥子さんが担当しました。コンセプトは、ため池の中に建物を作る中で、(1)ため池を埋め立てない、(2)図書館の周りの水を循環させる、(3)ため池の環境を活かすことで、廻りの水の環境で周囲を冷やす、(4)これまでにない魅力的な親水空間を作ることで、公園エリアとつながりを持った環境を作り、街の顔となること、でした。そこで、外観は河内に点在する古墳がイメージされました。三階建ての建造物で、完成した時に完璧なも

のを作るのではなく、時間を経て表情を変えるものを目指しました。形状は真四角ではなく、いびつな形をしています。壁の色も赤味を帯び、ガサガサしています。コンクリートに色の粉を混ぜたものです。

高野さんは、「古墳は長い年月のうちに自然物のように周囲に馴染んでいますが、人工の構造です。そこでスケッチでは人工物であるが自然のものであるような力強い土木物をイメージしました」とおっしゃっています。

松原の古墳といえば、わが国五番目の、全長三三五mの巨大前方後円墳の河内大塚山古墳があげられます。今池は、前方後円墳の墳丘を囲む周濠にあたるでしょうか。一五〇〇年ほど前の築山の古墳が、今では木々に覆われ、人工物から自然のものになっています。

読書の森の外観は、まさに人工物から将来、風景と溶け込んだ自然のものになるにふさわしい愛称にピッタリなのです。

建物が完成すると、二〇二〇グッドデザイン賞や日本デザイン賞二〇二〇金賞をはじめ、建築・デザイン関係の様々な賞を受賞しました。二〇二二年には、「ビュースポットおさか」二十六か所の一つにも選ばれました。数多くの市民らが利用するだけでなく、全国各地からキラリと光る個性豊かで多彩な魅力ある景観として視察・見学者が絶えない松原の名所になっています。